

研究領域名	人間機械共生社会を目指した対話知能システム学
領域代表者	石黒 浩（大阪大学・基礎工学研究科・教授）
研究期間	令和元年度～令和5年度
領域概要	<p>近未来では家電製品やロボットが自律的に活動するようになるとともに、意図や欲求を持ち、意図や欲求を持つがゆえに、それらを利用する人間との間で、言語を用いながら互いの意図や欲求を理解し合い、共生していくという関係を築くことができるようになる。このような世界がまさに、情報化社会の次に来る、人間と知能ロボットや情報メディアが共生する社会である。この新たな共生社会を実現するために、次の四つの研究から成る新たな学術領域を創成する。（対話内容を完全に理解できていない場合も、対話を継続できる対話能力を実現する研究、特定の話題に関する対話理解と対話生成を組み合わせた対話を実現する研究、ロボットが自らの行動決定モデルを構築したり、また、相手の行動決定モデルを推定する機能を実現する研究、実証実験を通して、意図や欲求を持つロボットの人々への影響を研究するとともに、ロボット共生社会における社会規範を提案する研究。）</p>
科学研究費補助金審査部会における所見	<p>本研究領域は、対話型ロボットを開発し、人間と機械（ロボット）が共生できる社会の実現を目指す先駆的な提案である。これからのロボット研究において重要なテーマとなる「対話」に焦点を絞り、社会関係モデルや人間モデルを元に深い対話を可能にするシステムの構築を目指す点は高く評価できる。社会規範を一般的視点から検討する計画や、将来的な法規制にも踏み込んだ計画も含まれており、発展性と波及効果がともに大きいと考えられる。総じて、これまでの優れた研究実績を基盤に、格段に発展した計画となっている。</p> <p>また、人・機械系のより高度な対話システム開発に向けた技術的なビジョンもしっかりしている。実証実験を整備し、若手研究者の育成を行うという総括班の役割も明確である。対話型ロボットの開発研究で実績を有する領域代表者が高い統率力を発揮することで、世界をリードする研究となることが期待できる。</p> <p>一方で、領域代表者の意向が効率的に発揮できる研究体制が組まれていることは本研究領域の強みであるものの、本提案の成否が専ら領域代表者のリーダーシップに委ねられており、短所にもなり得る。領域代表者をバックアップできるような組織作りが望まれる。</p>